

# 同窓会会報

高知県立大学看護学部

第24号

令和4年4月18日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



ごあいさつ

同窓会会長 中山 洋子



コロナ禍での3回目の春を迎えました。同窓会の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

2022年2月12日から高知県にも適用されていたオミクロン株の新型コロナウイルスの「まん延防止等重点措置」が、3月6日で解除されました。3月22日は、学位授与式が行われ、看護学部生81名、大学院看護学研究科博士前期課程18名、後期課程1名、博士課程(DNGL:共同災害看護学専攻)3名が学び舎からそれぞれの新しい道に向かって飛び立っていきました。DNGLの修了生には5年間のプログラムを終えたネパールからの留学生 Sushila Paudelさんとインドネシアからの留学生 Yudi Ariesta Chandraさんがおり、博士の学位記とともに国際交流推進賞が授与されました。看護学部同窓会は、103名の会員を加え、会員数(延人数)2,644名となりました。2020年春からの新型コロナウイルスの感染拡大のために、学部生は専門性を修得する3年次と4年次を、そして大学院博士前期課程の大学院生は2年間すべてを新型コロナウイルス感染症の問題に直面しながら、困難を乗り越えての卒業・修了となりました。コロナ禍での学びについては、ふり返った時に貴重な体験として生かされることを願っています。専門職であり続けることは学び続けること、学びは取り返しがつくものです。同窓会から記念として送らせていただいたハンディライトは、どんな暗闇の中でも光が照らしますようにという思いを込めています。

私は、福島県で雪国の春を経験したことがあるのですが、雪が解けて土が見え始め、そこから新しい芽が出て、春の日差しを受けて育っていく様子は、自然の美しさと力強さを感じることができます。そんな雪の残るウクライナで2月下旬からロシアの軍事侵攻が始まり、テレビやネットを通じて戦争を身近に感じる日々となりました。私は、1995年1月の阪神淡路大震災、2002年9月の世界貿易センタービルが崩れ落ちた米国の同時多発テロ事件、2011年3月11日の東日本大震災を思い出しながら、戦争の犠牲者や避難民の悲惨さを肌で感じています。そして、人々が危機的な状況にある中でいつも医師、看護師を中心とした医療従事者が自分の身の危険を顧みずに被災した人々の命を守ろうとしている姿に心が動かされます。看護専門職がどんなに尊い仕事であるのか、こんなに感じる時代はありません。同窓生は、新型コロナウイルス感染症との戦いの最前線で、看護師、保健師、助産師として働いています。ウクライナの戦争の被害者の支援活動に携わっている同窓生もいるのではないかと思います。同窓会は命の最前線で働いている同窓生にエールを送るとともに、同窓会が皆さんの応援団であるということを忘れないでほしいと思っています。

今年も桜の季節に看護専門職をめざして、看護学部生83名、大学院看護学研究科前期課程15名、後期課程7名が、高知県立大学池キャンパスに入学してきました。収束が見えないコロナ禍ですが、それぞれの学生が自分のめざす目標に向かって進んでいけるように、同窓会も様々な工夫をしながらサポートしていきたいと思っています。今年度も皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。



# ようこそ先輩！

あの日がつなぐ今

川島 美保さん  
聖カタリナ大学人間健康福祉学部看護学科



私の高知県立大学看護学部同窓会とのご縁は、実は、学部入学前から始まりました。高校3年生の看護の日に、高知女子大学のオープンキャンパスに参加し、現副学長の中野綾美先生とお話をさせて頂き、その日に看護教員になることを決め、看護学科への進学を決意しました。その意思を高校の先生にお伝えすると、その年に着任された養護教諭の先生が丁度、高知女子大学の卒業生で、つてを辿って、受験前に高知女子大学の卒業生からお話を聴く機会を設けて下さいました。そのときに、お会いしたのが、梶原和歌前同窓会会長です。看護の魅力をたくさん教えていただき、夢がさらに膨らんだのを覚えています。このとき、すでに、同窓会の恩恵にあずかっていたのです。

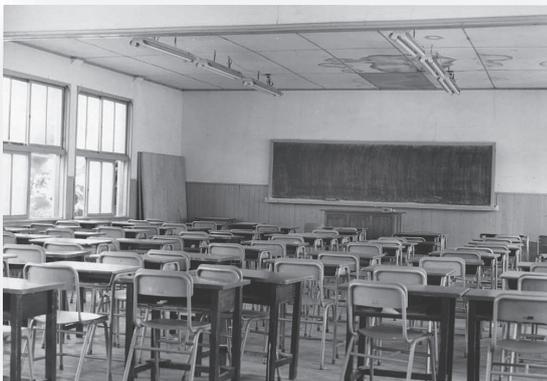
卒業後は、小児病棟や小児外来の看護師を経験した後、大学教員として、看護を伝える立場になりました。1校目の高知大学では国立大学初の助産師課程の開設に携わりました。私自身は助産師ではありませんが、初期の検討メンバーとして学部、専攻科、大学院での開設の3つの案の中で、「10年後のスタンダードを目指したい」と最も困難な大学院開設案を選択し、何年後かに実現しました。2校目の日本赤十字豊田看護大学では大学院に小児看護専門看護師教育課程を開設するために、縁もゆかりもない土地に着任しました。自分のCNSコースでの学びを思い出しながら、カリキュラムを構築しました。修了生から「先生が名古屋に来て下さったから、CNSになれました。」との喜びの声を頂き、現在も小児看護CNSとして活躍しているのを見ると感慨深いものです。現在の聖カタリナ大学では看護学科と大学院看護学研究科開設メンバーとして着任し、専門の小児看護学・家族看護学に加え、学部・大学院で看護理論、看護研究を担当することとなりました。学部や大学院での学びを原点とし、自分なりの教え方・伝え方を考える日々が続きます。こうして振り返ると、日本初の4年制大学の教育機関として生まれた看護学科のパイオニア精神も知らず知らずのうちに、受け継いでいたようです。また、10年程前から、看護師を中心とした医療職にコーチング研修を行っています。コーチングを活用した教育を行なうことで、新人離職率が低下したり、ケアの質が変わっています。教育方法1つで、成長の仕方が大きく変化することを目の当たりにし、「人を育てる」という奥深さにますます興味・関心が深まる毎日です。丁度2年前に学部の同窓会があり、時が流れて、生き方はそれぞれでも、そこには変わることはない時間を感じました。

これまでのご縁に感謝するとともに、看護学科と同窓会の益々のご発展と皆様のご活躍をお祈り致します。桜の日に寄せて。

## 高知県立大学今昔フォトライブラリ

看護学部に残っている写真から高知県立大学看護学部の今昔をご紹介します。

1980年代  
永国寺南舎教室



現在  
看護福祉棟教室



# 先輩の職場は今

## 倉敷中央病院

倉敷中央病院は岡山県西部にある1,172床の急性期病院で、1923年に創立されまもなく100周年を迎えます。

現在は高知県立大学の卒業生が8名勤務しています。それぞれにメッセージを寄せさせていただきます。

『病棟で看護師をした後、昨年3月から予防医療プラザで保健師として働いています。予防医療というこれまで経験していない分野ではありますが、個別性を大切にされた保健指導ができるように日々頑張っているところです(板野(旧姓:河野)静佳さん)』

『現在板野さんと一緒に予防医療プラザで働いています。大学で先生方にいつも言われていた「根拠」を今も大事にして看護を実践しています(中川(旧姓:山元)佳奈さん)』

『高知県立大学1期生として卒業し、呼吸器内科で4年間、循環器内科で3年勤務しました。現在は心不全や冠動脈疾患の患者さんの看護をしています。入退院の多い部署ですが、学生の時から大切にしている患者さんの思いに寄り添う看護に取り組んでいます(石井理沙子さん)』

『今3部署目の救急病棟で働いています。最近、社会や地域のニーズを反映した看護や働き方に変える力を備えつつ、日々楽しく看護をしています。女子大メンバー集合の機会にもなり、とても懐かしく楽しかったです(伊藤(旧姓:西森)絵里さん)』

『私は今NICU、産科病棟で勤務しています。様々な疾患をもった母子との関わりも多く、難しいと感じることも多いですが、患者さんからの感謝の言葉に元気をもらい、赤ちゃんの可愛い姿に癒される日々を送っています。助産師として色々な経験ができること、命の誕生の場に関われることにやりがいをもって働いています(高尾佳奈さん)』

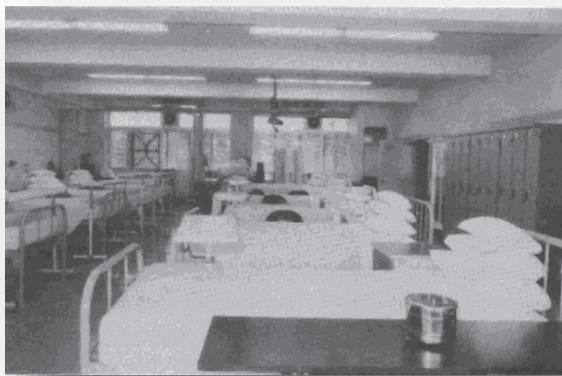
『私は循環器内科に勤務しています。心不全の方が多く、生活背景などを考慮し一人一人に合った指導を心がけています。大学で学んだことが今の看護に活かしていると実感することも多く毎日充実しています。コロナ禍で大変ですが皆さん頑張ってください(森本紘規さん)』

『修了後はがん看護専門看護師として組織横断的に活動しています。臨床では大学・大学院での学びを活かし、患者さんとの対話を大切に、その方の力を引き出し主体的に生きるエンパワーメント支援を心がけて日々奮闘しています(平田佳子さん)』

(写真左から石井 理沙子さん、伊藤 絵里さん、平田 佳子さん、中川 佳奈さん、板野 静佳さん)



1980年代  
永国寺南舎看護実習室



2000年  
基礎看護実習室



同窓生のみなさまの大学時代の会報に掲載してもよいお写真が手元にごございましたら、ぜひ同窓会事務局にお寄せください。お待ちしております。

## ハストロさんとの思い出プロジェクト

令和2年3月に本学看護学研究科災害看護学専攻博士課程を修了した、ハストロ(Hastoro Dwinantoaji)さんが、修了後わずか1年余りで急逝されました。イスラム文化では、亡くなった後の世界が本来の人生とされているため、日本のように故人を偲ぶというより残されたご家族に寄り添うことが大切にされるそうです。そこで、ハストロさんが日本で過ごした5年間の様子をご家族にお伝えし、ハストロさんとの思い出を共有するために、このプロジェクトを立ち上げました。

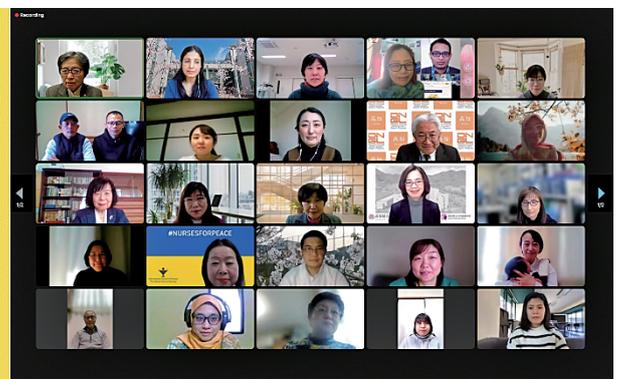
Dr. Hastoro Dwinantoaji (ハストロ ドウイナントアジ博士)

平成27年4月、大学院看護学研究科共同災害看護学専攻博士課程入学、令和2年3月修了

博士論文題目: Analysis of Factors Influencing the Community Health Cadres' Participation in Flood Disaster Risk Reduction in Indonesia

ハストロさんが日本でどのように過ごしていたかを、思い出とともに様々なかたちでご家族と分かち合う会を企画し、「ハストロさんとの思い出プロジェクト」と命名しました。日本で学んだ5年間に、ハストロさんは色々な方と交流し、まさしく国際交流を留学生の先頭に立って行っていました。プロジェクトでは、ハストロさんとの画像・動画やご家族へのメッセージを集め、当日の準備をしました。準備は、共同災害看護学の留学生も含めた後輩達が中心になって行いました。

思い出プロジェクトは、令和4年3月6日(日)の13時から1時間あまり行われました。当日は、後輩の留学生が日本語で司会を務め、最初に指導教員であった神原教授が挨拶され、黙とうの後、ハストロさんの日本での活動がビデオで紹介されました。次に、ハストロさんのお母様とお姉様から、ハストロさんの日本留学の思い出と、日本の仲間への感謝の気持ちが伝えられました。その後、「ハストロさんとの思い出を語ろう」と題して、共同災害看護学専攻の他大学の同級生、専攻の先輩、インドネシアの住学生協会の方、留学生の後輩、元大学職員等々、ハストロさんの人懐こい人柄を示すように、多くの方々から思い出を披露していただきました。また、同時に5年間の思い出を写真を通して紹介し、多くの方々との交流があったことを共有しました。最後に、高知の同級生から挨拶があり、5年間の思い出が語られました。また、この同級生からの呼びかけで、ハストロさんの好きだった「365の紙飛行機」を参加者全員で合唱し閉会しました。ご冥福をお祈り申し上げます。



# 幅広い領域で活躍する修了生

氣谷 知里さん（修士11期生）  
中芸広域連合地域包括支援センター



高知女子大学大学院看護学研究科を修了して早くも11年が経ちましたが、現在も変わらず、諸先生方とのつながりや、修了生の仲間達とのネットワークにより支えられていることを感謝しています。大学院修了後は、公益社団法人こうち看護協会訪問看護ステーション、医療法人おくら会訪問看護ステーションに就職。平成26年に在宅看護専門看護師認定資格を取得し、訪問看護実践や所属施設内外での教育などを担ってきました。令和3年4月からは、中芸広域連合地域包括支援センター（センター長）で勤務しています。

中芸広域連合は高知県東部に位置し、近隣5町村で構成されています。高齢化率45%と少子高齢化が加速的に進み、過疎化や専門職（特に介護職）の人材不足という地域課題があります。さらに、2020年以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響は、私達の生活様式を大きく変容させています。高知県下の中でも中芸地域の感染率は低い状況ではありますが地域の事業所の多くが小規模法人であり、一人の利用者に対して複数のサービスが提供されているケースも多く、仮に、コロナウイルス感染症が発生した場合、更なる感染拡大の可能性も危惧されます。その為、感染症が発生した場合においても代替サービスへの切り替え等、介護保険サービス利用者等に必要なサービスが安定的・継続的に提供される体制の構築が早急に必要です。今まで手探り状態で行ってききましたが、課題を整理し、地域の特性でもある小規模ならではの強みを生かし、中芸みんなで知恵を出し合い、互いに支え協力し合う新しい体制の構築に向けて、取り組みははじめたところです。また人材不足の課題についても、中芸地域で介護に関わる皆さんの現状把握や、生活援助従事者研修などを実施し、少しでも興味のある方が介護分野への参入のきっかけになるように、日々、努めています。

地域では、様々な複雑な課題や多様なニーズをもちながら生活されている方も多くおり、ネットワークを構築し、多職種と重層的に協働していくことが重要だと考えています。自分自身も、先生方や諸先輩方から学んだことを、実践の場に活かし、先輩たちに伝えていけるように、今後も自己研鑽し取り組んでいきたいと思っています。

皆本 美喜さん（修士14期生）  
独立行政法人 地域医療機能推進機構 神戸中央病院



勤務している病院は、神戸市北区に位置し、急性期を担うとともに包括ケア病棟、緩和ケア病棟を有し、訪問看護ステーション、介護老人保健施設、健康保健センターを併設した地域医療支援病院です。看護師長として緩和ケア病棟に勤務し、家族看護の実践やスタッフへの教育に難しさを感じていました。それは家族看護の知識が乏しく経験知のみに頼っていたからです。

エビデンスのあるケアを目指し、大学院専門看護師コースに進学することを決意しました。専門看護師を目指すというよりも、自分自身の知識や能力を高めて臨床に役立てたいということが動機でした。管理者に相談したところ、大学院進学のための休職制度を新たに作ってくれ、進学の後押しとなりました。高齢の大学院生です。

大学院では、長年の臨床で培った経験知による問題解決の思考を取り崩す作業に苦労しました。そのような私に先生方や同期生が根気強く寄り添ってくださったことで、卒業できたと感じています。看護に必要な理論や概念、研究を学び、知識を実践に活用できるよう学修したことは、エビデンスに基づいた看護実践の追求に繋がっています。

卒業後は、病棟の看護師長として管理業務と専門看護師として活動をしています。病院で初めての専門看護師として模索しながら、患者・家族のニーズに沿ったケア、家族の力を引き出すケアができるよう努めました。実際の活動は、せん妄ケアチーム、ACPチームのたちあげ、緩和ケアチームの参加、専門看護師としての病棟ラウンドです。活動を継続することで、対応困難な家族の対応、家族の合意形成、治療・ケアの選択の意思決定、倫理的問題等で看護師や医師から連絡があり、実践・相談・調整等を実施しています。また、地域連携室に配属時には、神戸市から委託された「医療介護サポートセンター」のコーディネーターとして、地域の医療・介護職の相談、研修の企画・運営、講師を実施し、地域との連携の重要性を学びました。現在は看護部教育担当として、看護師教育、地域の医療・介護職の研修を担い、大学院の実習を受け入れる等後輩を育む楽しさを経験しています。日本看護協会のWEB研修の講師の機会もいただきました。

専門看護師を取得したことで、院内・院外で多くの出会いがありネットワークができ、自分の未熟さを感じながらも成長もさせてもらっており、先生方や同窓生との繋がりにも心強く感じ、出会ったすべての方に感謝しています。

# フレッシュに活躍する卒業生

「看護師として働いて」  
高知赤十字病院  
西内 柗樹さん(67期生)

看護師として働き始めて早一年が経とうとしており、時間が過ぎるのはとても速いなど実感しております。

働き始めた頃は先輩方の名前を把握できておらず、「わからないことがあったら〇〇さんに聞いてね」と言われ、違う先輩に声をかけ恥ずかしい思いをすることもありました。

また、学生の時は一人の患者さんを看るということに集中すればよかったものの、複数の患者を同時に受け持って、業務の優先順位を考えながら仕事をするという難しさから何から手を付けてよいかわからず、混乱することが多々ありましたが、いまでは少しだけ落ち着いて患者さんと関わることができていると思います。

看護師としてやりがいを感じる瞬間は、自分が行う看護ケアに対して患者さんから感謝の言葉をいただいた時で、自分の看護が認められたような気がして、とても嬉しい気持ちになります。2年目になりますが、より良いケアを患者さんに提供できるようこれからも頑張りたいと思います。



「保健師として働いて」  
宿毛市役所 健康増進課 健康指導係  
竹又 萌乃さん(67期生)

保健師として働いて約1年が経ちます。振り返ってみると、この1年間、自分の気持ちに向き合ったり、自分が行っている活動の意味を考える余裕はなく、ただただ一生懸命でした。でも、それだけ目の前の住民の方のことを考える毎日で、私はしっかり保健師をしていたのだと思えます。

大学生の時の私では考えられませんが、赤ちゃんから高齢の方まで、様々な住民の方に対して、1人で訪問支援をしたり、乳幼児健診業務を運営したり、赤ちゃん広場や運動教室を行ったりといろいろなことができるようになりました。毎月沖の島を訪問していますが、今では「お！来たか！待ちようけん！」と声をかけてくれる方が多く、とても嬉しいです。「あなたは真面目やけん、もうちょっと適当にしたや！」とまで言ってくださる方もいます。継続して訪問することで住民の方との関係が築かれることを実践を通して、学ぶことができています。

もうすぐ2年目になります。支援を必要とする人、支援が必要だと考えられる人に対して、一人ひとりに合った支援ができる保健師になりたいと思っています。そのためには住民の方との関係を少しずつ築いていくことが大切だと本当に感じます。「保健師としてあなたの力になりたい」という思いを行動に表し、1年目と変わらず、一生懸命であり続けたいと思っています。



「助産師として働いて」  
京都第1赤十字病院  
小竹 真由さん(67期生)

私は今、産婦人科・リウマチ内科・糖尿病内科の女性混合病棟で看護師・助産師をしています。主に切迫流産の妊婦さん、分娩後の褥婦さん、新生児、婦人科疾患の患者さんをはじめ、女性病棟のため色々な疾患の患者さんを対象としています。私は、総合周産期母子医療センターである当院で、様々な症例のお産を経験したいと考えて、入職しましたが、今年度からの方針変更により助産師も看護師の経験が必要であるということで看護師業務も行っています。はじめは、自分のやりたいことができず悩むこともありましたが、助産師は女性の生涯にわたる健康に関わる職種であり、分娩介助が全てではないことを再認識し、今はやりがいを持って働くことができています。まだまだ未熟ではありますが、心強い同期や尊敬できる先輩方、そして何よりも患者さんからの感謝の言葉や笑顔で退院される姿を励みにこれからも、自分が目指す患者さんに寄り添った看護ができる看護師・助産師を目指して頑張っていきたいと思っています。



「養護教諭として働いて」  
岐阜県郡上市立明方小学校  
牛丸 かおりさん(67期生)

春から小規模小学校の養護教諭として働いています。実習での経験が少なかったことや一人職であることから初めの頃は不安でいっぱいでしたが、校内の先生や地域の養護教諭の先生に支えられながら職務に励んできました。

保健室に入室する児童の中には、「見える傷」だけでなく「見えない傷」を体調不良として訴える児童、複雑な家庭環境を抱える児童など...本当にたくさんの児童がいます。「自分の対応がこれで良かったのか」と悩むことや迷うこともたくさんありますが、そんな時には看護学部で学んできた専門的な知識やコミュニケーション技術を振り返ることもあり、大学で学んだことが今の自分の礎になっていると感じています。そして、子ども達の笑顔に繋がった時には「この仕事についてよかったな」と思います。予測困難な時代であるため、新たな壁に直面することもあると思いますが、チーム学校の一員として、そして学校保健の専門職として子ども達の笑顔のために頑張っていきたいです。



# 第3回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会

## The 3rd Academic Meeting of Japanese Nursing Society for Simulation and Learning

第3回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会(大会長: 高知県立大学看護学部教授 大川宣容)をオンライン開催しました。本学術集会は、「看護シミュレーション教育の挑戦」をテーマに、Live配信(2月19日(土))とオンデマンド配信(2月11日(金)~3月6日(日))で行い、314名の方が参加されました。新型コロナウイルス感染症拡大によって、看護シミュレーション教育への関心が高まり、活発な議論が繰り広げられ、盛会のうちに終了しました。



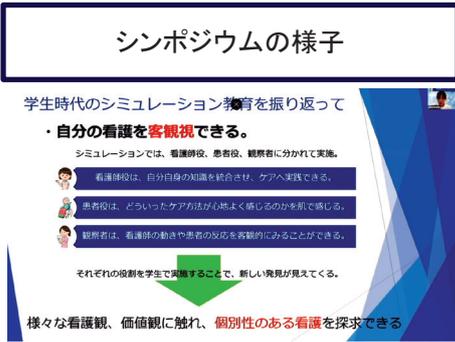
大会長 大川宣容先生が、会長講演として、看護基礎教育から継続教育にわたってシミュレーション教育が有用な教育方法あること、看護シミュレーション教育の可能性について講演されました。



熊本大学教授システム学研究センター 鈴木克明先生に「教育デザイン研究の理論と実際」についてご講演いただきました。



青山学院大学 鈴木宏昭先生に「認知的科学的観点から考える熟達化支援」についてご講演いただきました。



シンポジウムには、本学の卒業生が2名登壇しました。座長でシンポジストの増野園恵さん、そしてシンポジストの坂本静香さんです。坂本さんは、本学で学んだ看護についてトランジションの視点から振り返り、堂々と発表されました。



学内でのLIVE開催の様子



24名の中高生が看護を学ぶ大学生・大学院生の「今、まさに学んでいること」を聞き、オンライン上で交流しました。

開催にあたり、同窓会から学術集会抄録集への広告協賛をいただきました。また、多くの同窓生の皆様に支えていただき、本学術集会が開催できましたこと、深く感謝いたします。

大会長 大川宣容

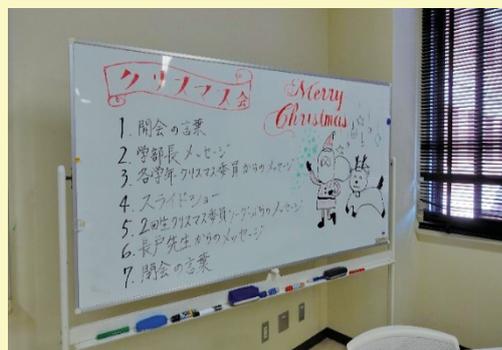
# 看護学部は今

## 「Z世代のクリスマス会」 2回生学年担当 久保田, 山中, 源田

12月15日の4回生が集まる年内で最後の授業を後の時間にクリスマス会が開催されました。看護学部恒例行事のひとつであるクリスマス会ですが、コロナ禍の下、さすがに例年のように皆で集まってというわけにはいきません。でも、そこは、「デジタルネイティブ」のZ世代が企画するクリスマス会、2回生のクリスマス委員が中心となって、感染対策を講じつつ、工夫を凝らした内容となりました。まずは、アルバム作り作業の見直しです。例年は、大勢が集まって、アルバムづくりをするのですが、そこを回避するために今年はスライドショーに変更。事前に先生方から頂いたメッセージと写真、学生間ではクリスマス委員を中心に各学年のグループLINEで集めた写真を編集して、当日は動画として流されました。流れる動画を観ながら、4回生は学生生活を振り返って、大盛り上がりでした。また、同窓会にご支援いただいたアルバムの1ページには、その日のスライドショーにアクセスするQRコードの入ったメッセージカードが入っており、後で振り返ることができる工夫もされていました。沢山残ったポケットには、ひとり一人が思い出の写真を入れて貰えるようにと、様々な配慮がされたアルバムでした。

また、会場に集まる人数を最小限にするため、他の学生と先生方はZoomで参加して頂きました。

最後に各学年のクリスマス委員が代表して、4回生に送る言葉を伝えました。当日もぎりぎりまで準備に追われていましたが、クリスマス委員の皆が協力して、自分たちなりに様々な工夫をしながら、国試を控える4回生と共にクリスマス気分を楽しむ貴重なひと時となりました。



上: 各学年のクリスマス委員が協力して準備したクリスマス会進行表

下: 感染対策の中でのクリスマス会の様子  
左: 同窓会からの支援で作成されたアルバム

## 「卒業生・修了生へ卒業記念碑の贈呈」



68期生、修士修了生の同窓生のみなさまに卒業、修了記念品として、蓄電ハンディライトを看護学部同窓会より贈呈しました。



今年度は、感染対策のうえ、池キャンパスでの学位授与式が執り行われました。

## 温故知新 その12

### 看護学重点シリーズ

小林富美栄監修

山崎美恵子・南裕子・松本女里・

岡部聡子・中桐佐智子・宮内美紀子共著

金芳堂（1980・81）全7巻

（写真にない第7巻は母性看護学です）



今回も、金芳堂看護学重点シリーズの紹介です。このシリーズの教科書は、Part I（重要事項編）、Part II（資料編）、Part III（問題編）、Part IV（チェック編）という構成になっています。Part III（問題編）では、看護婦・保健婦国家試験の過去問題も多数出題され、解答とともにPart I のどこを参照すべきか記載されています。

わが国の国家試験は、保健師助産師看護師法（1948年制定）に規定され、1950年に第1回看護婦国家試験、1952年に第1回保健婦・助産婦国家試験が実施されています。この教科書では、第41回から第58回までの国家試験からの抜粋が見られます。看護婦国家試験は1987年までは年2回実施されており、第41回は1971年に実施されたものです。以下の3問は、第41回・第42回に出題された問題のようです。

Q1. 次のうち誤っているものはどれか。（第41回）

- ① その人間がどのような人間関係の中で生活し、どのような社会集団の中で生計を立てているかということを見無視して看護の効果は期待できない。
- ② 看護の最終目標は、その患者の身体的、精神的、社会的自立ということである。
- ③ 医療業務の増加に伴い医師の業務は、次々と看護業務へ委譲すべきである。
- ④ 公衆衛生的立場から健康を保持増進するために、衛生教育、保健サービス、衛生行政の方法が考えられている。
- ⑤ よい観察は疾病の診断治療に役立つ。

A1: ③です。「次々と～すべきである」の表記はわかりやすくこの解答に誘導しています。②の最終目標は、エンドオブライフケアの必要性も重視される現在の考え方（患者の意向や価値観にそった選択ができるよう支援する）からすると、正しいとはいえないのかもしれませんが。

Q2. 看護におけるコミュニケーションに関し看護婦の態度が適切でないものはどれか。（第42回）

- ① 看護婦が援助者として役割を果たすためには、援助の目的を相手にわからせる。
- ② 患者に接したときの第一印象からその性格を判断して看護計画を立てる。
- ③ 患者が自分の気持ちをありのままに表現できるように配慮する。
- ④ 患者の状態に関する重要な変化の情報は適切なときに関係者に伝える。
- ⑤ 身振り動作による患者の意見の表現について、その意味を理解するように努める。

A2: ②ですが、①「わからせる」は患者を尊重した態度として適切なのか、③「適切なときに関係者に」は個人情報取り扱いについて、「適切なとき」の判断を看護師がするのか？「関係者」とは誰か？等、現在では引っかけというより不適切問題にも思われます。

Q3. 患者の示す一般心理反応に次のようなものが挙げられる。誤っているものを選びなさい。（第41回）

a. 心気傾向 b. 自己中心性 c. 依存性 d. 小児用信頼心 e. 被暗示性 f. 攻撃性 g. 劣等感

A3: なし です。不適切問題をあえて練習問題にしたのは、人は病気になることで様々な心理反応が生じることの理解を促すとともに、国家試験問題に解答できない問題があると示しているのではないのでしょうか。国家試験問題からも、看護の考え方や看護師としての役割が変わっていることを実感できると思います。

## ご寄付をいただいた方

37期生一同様  
山田 薫様 (26期生)  
福岡恵美子様 (5期生)  
南 裕子様 (11期生)  
高橋久子様 (7期生)  
岡田 溪子様 (7期生)

西山純子様 (33期生)  
繪内則子様 (27期生)  
和田素子様 (16期生)  
農本紀美子様 (16期生)  
宮内美紀子様 (16期生)  
匿名希望1名

左記の皆様より寄付をいただきました。  
誠にありがとうございました。  
(敬称略 令和4年3月31日現在)

### 令和3年度 高知県立大学看護学部 学生の看護研究発表会



### 令和3年度 高知県立大学看護学研究科 博士前期課程、共同災害看護学専攻院生の 修士論文発表会



令和4年3月1日と3日に看護学部4回生の看護研究発表会、3月5日に看護学研究科博士前期課程の学位論文発表会、共同災害看護学専攻の院生の論文発表会が感染対策を講じながら開催されました。それぞれが看護研究で探求してきた成果を発表する機会となりました。

## 寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。  
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。  
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

同窓会会報は本号24号の発刊となりました。24号では、ご活躍されている先輩方、修了生・卒業生からメッセージをお寄せいただきました。  
コロナウイルス感染症の収束が見えない中ですが、感染症対策を講じながら大学の講義や看護演習、様々な行事を行っております。「看護学部は今」の記事のように、看護学部のクリスマス会も形は昔と違っても伝統ある行事として続けられています。今後も大学の様子も会報でお伝えしていきたいと思っております。  
同窓生のみなさまの在学中の大学の写真やご意見などもお待ちしております。

(池添・川本・西内)

編集後記

### 事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部  
Fax: 088-847-8750

### ホームページアドレス

高知県立大学  
<http://www.u-kochi.ac.jp/>  
高知県立大学看護学部  
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>